

## 野上彌生子の〈準造もの〉

——〈去私〉の方法——

佐々木 亜紀子

はじめに

野上彌生子が大正期の終わりに発表した「準造もの四部作」<sup>(1)</sup>と呼ばれる作品がある。「澄子」<sup>(2)</sup>〔中央公論〕一九二三・四)、  
「準造とその兄弟」(同、一九二三・九)、「お加代」(同、一九二四・四)、「狂った時計」(同、一九二五・一)の四作である。  
「澄子」が『中央公論』に発表された際の末尾に、次のような付記がある。

(编者附記) 本篇は作者が最初の長篇小説の第一部を成すものにして、今後久しきに亘つて、第二部「お加代」第三部「横井俊造」<sup>(3)</sup>或は「佝僂の父」と云ふやうの順序にて発表し、此等数篇の姉妹篇を聯ねて数百枚の一大作を完うする計画なりと。「今までの作はみんな此長篇を書く為めの習作のやうな気がします」とは作者の言。以て此作に対する作者の抱負を窺ふべし。<sup>(3)</sup>

最初の計画では三部作だった可能性もあるが、その後、「狂った時計」まで四作品が発表され、『野上彌生子選集 第四

卷』では瀬沼茂樹によって『狂った時計』としてひとまとめにされた。いずれも彌生子の叔父で、実父の末弟小手川豊次郎をモデルにした「準造」をめぐる人々を描く連作小説である。

ここでは、野上豊一郎の描いた豊次郎叔父を参照しつつ、この「準造もの四部作」あるいは『狂った時計』を〈準造もの〉として、彌生子の長い文学的営為における意義を考えてみたい。

## 一、〈育兒もの〉から〈準造もの〉へ

よく知られるように、野上彌生子は一九〇七（明治四十）年二月『ホトトギス』に夏目漱石の推薦文をつけて、「縁」で文壇デビューを果たした。当時『ホトトギス』が標榜する写生文が彌生子の足場を作った。そのうち、彌生子は数年にわたって（一九一〇～一九一九年）、〈育兒もの〉とも呼ぶべき一連の作品を手掛けた。そこには、彌生子の分身のような女性が、東京の〈新中間層〉らしい暮らしぶりのなかで、模範的な育兒を展開する様子が描かれていた。〈育兒もの〉は、身近に素材を見出している点で、写生文の延長線上にあつたともいえる。

そして一九二〇年代になると、彌生子自身はすでに育兒を終えており、〈新中間層〉の育兒も小説の題材としては最早新奇ではなくなっていた。<sup>6</sup>加えて、一九一四年九月、彌生子の実父で小手川家の中心だった角三郎が亡くなった。次いで一九一五年十月には準造のモデルになった豊次郎、一九二二年十二月にはもう一人の叔父金次郎が逝去する。一つの世代が過ぎ去って、故郷の私的な事情が語り易くなったことも〈準造もの〉を書く契機となつたろう。

また、彌生子が〈育兒もの〉を書いていたころ、のちに彌生子と親交を深める中条（宮本）百合子が「貧しき人々の群」を『中央公論』（一九一六・九）に発表し、注目を集めた。東京に住みながら、祖母の住む福島県での見聞を題材にし、農村の「貧しき人々」を描く手法は、彌生子になにがしかのヒントを与えた可能性もある。もともと彌生子は東京に住みな

がらも、故郷と強い絆で結ばれていた。そのために、故郷の町の事件、政争、商家の複雑な家族関係が、小説の題材として新しく見いだされたのだ。

豊次郎叔父の東京の家は、彌生子が明治女学校在学中に寄宿していた家である。当時、豊次郎宅には従妹のきよがしばらく同居していた。きよは豊次郎と女中との間に生まれた子で、里子へ出されたのち、しばらく東京の家に戻された末に、白杵の小手川家に引き取られたという。彌生子は〈育児もの〉で養育や教育に熱心な母親を描いてきたが、きよの周囲には〈新中間層〉的母親はいない。このきよをモデルに、彌生子はすでに「雛子」(『少女画報』一九一五・十一〜一九一六・四)を少女向け読み物として書いている。しかし、きよを、豊次郎の物語の一面として、あるいは故郷の物語の一面として描き直したところに〈準造もの〉は始まる。〈育児もの〉からの離脱は、このように用意されたのである。

## 二、小説の方法…連続性と完結性

〈準造もの〉四作の梗概をおおまかに述べれば、以下のようになる。

第一作目「澄子」は、甲州の百姓家へ生後五十日で里子に出された澄子が、七歳のとき、「佝僂」の実父横井準造に引き取られる経緯。第二作目「準造とその兄弟」は、準造が故郷で選挙に立候補し、兄弟の確執につながる運動資金の工面で奔走するが、結局落選して故郷を後にするまでの話。第三作目「お加代」は、準造が「金で買った」美しい加代の失踪劇。第四作目「狂った時計」では、準造が暮らしに逼迫して高利貸になり、十七歳になった澄子が、ある偶然から実母に再会したことが語られている。

このように、〈準造もの〉は、準造を中心点にした十年間を、彼をめぐる人々と共に多面的に描き、「数篇の姉妹篇を聯ねて数百枚の一大作」に仕立て上げられている。また一方で、準造以外の中心的登場人物がそれぞれの小説に浮上し、短

篇としての完結性を備えているのも特徴である。「澄子」の澄子、「準造とその兄弟」の小兵衛と七郎、「お加代」のお加代と古沢、「狂つた時計」の澄子の実母や女中などがそれである。これらの登場人物は、ほかの三作でわき役にありながら、突然に焦点化され、存在感をもって描かれる。

長篇小説としての連続性と短篇小説としての完結性をバランスよく作り上げるのは、彌生子の得意な方法で、のちに『迷路』などの大作をしあげてゆく土台になる。そしてこれは、夏目漱石が『彼岸過迄』で試みた方法でもあった。漱石がその予告ともいふべき「彼岸過迄に就て」で、「かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだらうかといふ意見を持してみた」と述べて実践したことは周知の事実である。しかし『彼岸過迄』の敬太郎とは異なり、〈準造もの〉の主人公は、一貫して「異形」の他者として描かれている。

準造が金庫口の前に立つと、彼の方が低かつた。併し後に電燈をしようた彼の影は厩大に拡がり、まつ黒な異形な塊まりになつて金庫にかぶさつた。(狂つた時計)

これは「狂つた時計」末尾近くで描写された準造である。(準造もの)の秀逸さは、ほとんど心理描写のない準造という「異形」の主人公を据えたところにある。以下、四作品を連続性にも目配りしつつ、一作ずつ検討してゆく。

### 三、「澄子」…目覚めてゆく第二の主人公

小説「澄子」は甲州の山の中に始まる。澄子はその百姓家へ生後五十日で里子に出され、老人とその「連合のお婆さんと、

三人の子供」を、父親、母親、兄さん、姉さんと呼びつつ成長した。「本統の親」は横井準造という「偉い学者で代議士」とのことで、「最初の三十円と、月々の仕送の十円」という条件であった。「偉い学者で代議士」の子を育てると言う「名譽」や「楽しい夢想」も伴って、「善良な老人」は澄子をかかわいがる。だが「実父は極端に冷淡」で、仕送りは途絶え、交渉しているうちにその居所すら不明になる。加えて周囲が保安林となつて伐採ができなくなり、「老人の一家」は窮乏する。そこで代議士の居所を探し出し、「小学校の先生」の代筆で窮状を訴える手紙を出す。すると「東京からは早速澄子を引き取る」と返事があり、澄子を可愛がついてた老人は動揺する。老人が澄子と上京して会つてみると、横井は「佝僂」であった。だが「物に怯ちけた様子は微塵」もない態度で、「演説のやうな口調で」自分の用件だけを伝えると、滞納した「里扶持」の話もないままに外出してしまふ。

「澄子と二人きり部屋に取り残されたお爺さんは、説明の出来ない心持を味つてゐた。これがあの長い間待ち望んでゐた日か」というお爺さんの落胆は深い。「里扶持」という収入だけでなく、澄子を預かつた日から、「偉い学者で代議士」の子を育てる「名譽」や、いつか感謝される日が来る「夢想」は、ことごとく裏切られてきた。仕送りの要求に対して、横井は「食べ物でも、着物でも、穿物でも」なく「手紙」で済ませた。「里扶持は以後間違ひなく送れる。その代り娘は今暫く預つて呉れ」と言われることを期待する老人に、横井は「早速澄子を引き取る」という返事をする。挙句の果てに、澄子への再会の喜びも見せず、育てた老人への感謝もなく、滞納した「里扶持」もなく、「帰りの旅費」だけで老人を追い返す「偉い学者で代議士」。老人と横井との意思疎通が成立していないのは明白である。それは老人の「善良」過ぎる愚鈍さだけでなく、老人の思惑を忖度しない横井の「極端に冷淡」な一面を浮き彫りにする。

そして老人はそつと帰郷し、澄子が「朝目を覚まして見ると、お爺さんの代りに小間使のよねが眠つてゐた」のである。目覚めた澄子がその後の東京での視点人物になる。小説のなかで澄子はいくども「目を覚ま」す。東京へ出かける途上、「目を覚ました度に湖と富士山があ」り、次に「目が覚めた」ときは列車の中におり、次に目が覚めたときにはお爺さんとは

別れていた。この小説はまさに澄子が〈目覚め〉てゆく成長小説なのである。

東京の父親の家には、横井が「家内」だと紹介するお加代と小間使のおよねと車夫の新吉がいる。お加代は二十歳代前半の美しい女性だが、正妻ではなく「元芸者」である。澄子は自分の父親が人間を「金で買」ったことを知り、「恥かしい秘密」と感じる。一方、お加代は澄子を「虐待以上」の「無関心」で通した。車夫と小間使とが澄子にとって「一番久しく父母」となり、澄子は「自分の血を分けた本統の母親」を思い「楽しい小説的なめぐり逢ひ」を夢みている。ただし「その人は今何処にどうして生きてゐるだらう」という「運命的な悲しみ」を分かつ人はいない。父親にすら「本統の母親」について尋ねることはできない。なぜなら「父親の性格は、彼の身体が奇妙で風変わりであると同様に、奇妙で、風変りに見えた」からである。だがこの母娘の「小説的なめぐり逢ひ」はのちの「狂った時計」という小説で現実になる。

注目されるのは、ここに描かれた澄子が、それまで彌生子が書き継いできた〈育児もの〉では決して扱われない子供であったことだ。「赤ん坊は皆んな神様の子供」<sup>⑨</sup>だとして、女中にかしずかれ、よい環境で学校教育に順応するように育てられる〈新中間層〉の子供と、澄子とは大きく隔たっている。しかし澄子は学校の友達に深入りせずとも「その境遇に馴れ」、ひとりで裏庭で遊びうたう。それは「如何なる周囲の事情も、十四の娘の身体に脈打ち弾み立つてゐる生命力を、抑圧し尽すことは出来なかつた」からである。ここには〈育児もの〉とは別の子供観、子供の「生命力」を信じる生命主義的子供観がある。続く作品のなかでも、澄子には細やかな心遣いや深い物思いをあわせもつ成長がみられ、〈準造もの〉は全体で澄子の七歳から十七歳までの成長小説ともなっている。

#### 四、「準造とその兄弟」…立志青年の挫折

「準造とその兄弟」は、まず横井準造の半生から語られる。準造は「自分が醜い身体」ゆえに「女の美しさ」に価値をお

いていた。そのため「有利な妻」を半年足らずで「放り出し」、美しいお加代を「金で買った」。九州の商家に生まれたが「立志伝の中の人」のように学問に邁進し、「大学の予備門を出る」と、アメリカで七年過ごし経済学の学位を取得した。押し強さでN伯に取り入り銀行に就職斡旋もされたが、辞職し「政治界に入る」。一度は成功するものの二度目は落選。そして次々と職を替え、澄子を引き取り、一緒に故郷A——町へと向かう。

そのころ澄子は「十三四の瘦せた青白い娘」になっている。大男の新吉と、「小さい佝僂の紳士」である父親準造と共に、船で故郷へ向かう。この「風変わりな三人」への好奇の目に対して、澄子は「不思議な、自分でも気のつかなかった、父親に対する強い愛が燃え上」がる。本家の主人は準造の長兄小兵衛、分家は次兄七郎。準造は町を二分する選挙に出馬したのだ。「家の財産を守ることを祖先に対する第一の義務と感じ」、「主権が長兄」にだけあることに疑義を抱く準造の「思想」と、郷里の商家とは根本的に相容れない。次第に次兄七郎は金銭をめぐって激しい感情をぶつけるようになり、田崎という弁護士も謀略にも遭い、味方側だけが選挙違反で拘引されるようになる。果して、惜しくも落選となり故郷をあとにして上京する準造に、次兄は選挙に使うはずだった「金包」を渡そうとするが準造はそれを撥ねつけ、兄弟の確執は頂点になる。結局長兄が家長らしくとりなし、澄子に渡して事態を収拾させ、準造たちは故郷を発つ。そして大阪に着いた準造のもとへお加代失踪の電報が届くところで小説は終わる。

地方の町の政争やそれに取り組む一商家の苦境、兄弟の葛藤がスリリングに展開し、「知識のみ」が自分を「救ひ出してくれる」として刻苦勉励した準造という立志上京青年の挫折の物語となっている。そしてここで披瀝される準造の「思想」が、アメリカで経済学を学んだ者らしく、長男による家業継承や家督相続への疑義という形になっていることに留意すべきであろう。それは裏を返せば、「佐賀屋」に指摘される通り、「学問や身分は二の次にしても」「この土地は日本国ぢうのどの土地よりも可愛いと云ふ」気持ちしが希薄な点で、郷里での選挙に勝ち目は無い。郷里へ着く前に田崎が言った「予言者は故郷に容れられず」ということは、そのまま準造のことになった。

こうして挫折してゆく父親をそっと見守る澄子は、陰影のある思慮深い少女として成長する。澄子は最初「善い人か、悪い人か、又は好きな人か、嫌ひな人か」といった「簡単な分類法しか持たなかつた」。しかし郷里で父が「打ち解けた尊敬と愛」を得ていることを悦び、「女人上り」の加代や澄子自身の「曖昧な身の上」が噂話にされることに心を痛め、不利な状況の父への「心配」や「愛情」が育っていく。

また澄子を通して、次作「お加代」の伏線が二点示されていることも注目される。一つは「今度の帰国について澄子を伴ふのを勧めたのはちよつとそんなことを云ひ出し、さうもない、お加代」であり、「父親に説いた時のお加代の熱心な美しい顔を、澄子は忘れなかつた」という件である。お加代がこのとき、次作「お加代」で語られる古沢との出奔を企図していたことを、常とは違うお加代の様子として澄子は感じとっている。また澄子は「私が手紙をやつたのに何んとも云つて来ないわ」と、女中のおよねから返信がないことに不審を漏らす。これも加代の失踪で返事が出せない状態であることの伏線となっている。いずれも澄子の勘のよさが際立っているといえよう。

野上彌生子の「手帖」(七月二十四日)には、「このテーマは彼(引用者注:夫の豊一郎)の云ふやうに古いのかもしれない。(中略)しかしこれだけは一度は自分がか、なければならなかつたものだ。新古が今の自分には問題ではない」とある。豊一郎が「古い」と評したのは、立志青年の挫折、あるいは郷里の因習との確執が、自然主義文学的だということだろうか。それを認めつつも「新古が今の自分には問題ではない」と、自己の必然性に従う矜持は、すでに『中央公論』で小説家としての地位が揺るがぬものになっているという自信に裏打ちされているようだ。

「準造とその兄弟」の発表は関東大震災の月であったが、彌生子は被災したにもかかわらず、この続篇以外にも、旺盛に執筆を続ける。明けた一九二四年一月五日の出来事として、「日記」には、「私の初めての机が来た」と特記している。そして震災後に「皆んな健康で新しい年を迎えるといふことをおもふと勿体ない」としたうえて次のように続ける。



自分の生活をよりよくすること。たゞそのみを専一にしなければならぬ。うんとく、勉強しよう。今年よりも来年だ。来年よりも来々年だ。うぬぼれてはならぬ。いぢけてはならぬ。——しつかり自分の路を踏んで行くのみだ。

彌生子の粘り強い勤勉さが小説家としての確実な歩みを支えていることが判る。加えて、すでにこれほど仕事をしている彌生子ほどの人が、「初めて」自分の机を持ったということに驚かされる。

## 五、「お加代」…さすらひ人の逃亡

「お加代」は女中およねの語りから始まる。それはお加代の失踪の経緯を、夫の新吉へ語った「露骨であるだけ、一層正確な顛末」である。およねの自己弁護を含んでいる可能性もあるとはいえ、お加代の「念入りな瞞し方」から、それが覚悟のうえの計画的な「駆落」であったことが判る。

そして準造にとってのお加代の失踪は、故郷から持ち帰った「精神的裂傷」や「疲労困憊」から彼を「咄嗟に甦へ」らせるものとなった。準造は「次兄から贈られた千田束の包」を使って、「お加代の搜索に集注」し、相手が古沢という洋画家であることを突き止める。「準造とその兄弟」末尾で、兄弟の確執と絆とを確認させたあの「金包」が、全く別の目的で散財されるという皮肉な成り行きになったのだ。

一方、お加代は出奔先の信州の山にいた。山に辿り着いた夜、十九歳の春から十年間の「鎖」からやっと「自由な世界に辿りついた勝利の凱歌なのだと思つ」て、お加代は激しく泣く。しかしこの小説では、お加代の「駆落」を、「素人じみた迷ひ方」と突き放す。お加代はあくまで玄人なのだと思つけるのである。加えてその「迷ひ」の原因はお加代の老いへの惧れだとしている。別の男が「若い女のために彼女を見換え」、「あと百日もすれば三十だと云ふ年も情けな」く思っ

たという「遺瀨ない焦慮の現はれに過ぎなかつた」というのだ。

このお加代に対し、古沢は「最初あの人（引用者注：横井）を拒絶し通さなかつたところに君の責任がある」、あるいは「君は何処までも横井夫人だ。（中略）侵すべからざるものを侵したところに二人の愛の痛みがある」などという。だがお加代は「初めて人間らしい恋人の取扱ひを受けたのだと云ふやうなことをはつきり意識することは出来な」い。そして古沢はお加代の肉親が横井から得ている生活費の清算すら考えて、お加代に「愛に対する真剣な献身」をみる。結局この逃避行は、汽車に乗って逃げおおせたと思つたところへ、次の停車場との間のトンネル事故という不運によって頓挫し、小説は横井がやってくるのを見た古沢が客車を出ていくところで閉じられる。

要するに「お加代」という小説のなかで、お加代は救われることがない。若さと美を好み、どんな男との関係においても金銭が切り離せない玄人とされる。そして境遇においても発想においても、絵画を西洋に学ぼうとする古沢のような男の「人間らしい恋人」にはなり得ないのだ。その点でお加代のような境遇の女性に対する同情は希薄であり、社会の構造的矛盾を批判する意図もない。それでもお加代をその境遇からの逃亡を企図する女性として描いたことは特筆されるべきだろう。

〈準造もの〉で、お加代は幾度も「金で買った」と繰り返される。また、澄子に「無関心」を通し（澄子）、「我儘」「無智」「ヒステリー」「幾らかの浮気」（準造とその兄弟）といった面をもつ美しいだけが取り柄の酷薄な女として描かれている。しかし「お加代」では、古沢というお加代が、「哀れなさすらひととしての心霊」を抱き、一時でも「人生の曠野」に立ち向かおうとしている。澄子から眺められた他者ではなく、心を閉ざす以外に方法のない「魂の嘆き」を内に秘めた女主人公となっているのだ。「澄子」の末尾で、お加代の「買はれた妻の魂の嘆き」に触れていることが「お加代」の予告ともなっている。

一九二四年三月十一日付「日記」では、豊一郎から「リアリストイクでない」と云つて悪口を云はれた」と彌生子は書き

つける。豊一郎はお加代のモデルになった女性を直接知っているだけに、そのような「悪口」が出たのかもしれない。<sup>10</sup>後に詳述するように、豊一郎はすでに『赤門前』（『国民新聞』一九〇九・九〜十二）で、この女性を描いている。また彌生子自身も六十年を経て、「優しく親切」な面を見せる「お里」として『森』（新潮社、一九八五）で描いている。

## 六、「狂った時計」…異形の女

「狂った時計」は、澄子が上京した小兵衛を駅に出迎えたところから始まる。準造一家はこの二、三年、生活に追われて引越しを繰り返した末、奥まった露地に住んでいる。小兵衛から父準造の様子やお加代の「落ちつ」きを尋ねられた澄子は、三年前お加代が帰ってきたときの狂乱を思い出す。「不貞な妻の横暴に対して、犬のやうに忍び屈」する父の気持ちや、十七歳になった今の澄子は、当時よりは分かるようになっていた。同時に、どこかで生きているかもしれない母親を澄子は思う。そこへ暇を出されて新吉と朝鮮に行った女中のおよねから澄子宛に手紙が届く。そのなかには澄子の母「加藤くさん」が東京へむかったとあった。「澄子」で予告された「小説的なめぐり逢ひ」（澄子）が現実になるのである。しかしおよねの文面に、澄子は「秘密な杞惧」を読み取る。この小説では、決して甘美で感傷的な「小説的」母娘再会を描かないのである。

父親の指示で宿泊中の伯父を訪ねると、伯父から実の母親おくにご会いに来ることを知らされる。おくにはもと「小間使」であったのだ。母は小兵衛に感謝を述べ、澄子と別れた顛末、亡くなったと言われていたこと、およねとの再会、髪結いをしていことなどを話す。その後、小兵衛の配慮で母娘は会えるようになり、澄子は祖母と母と自分とが相和す「楽しい夢想」もする。しかしおくには、髪結いの亭主然とした「困り者」の「良人」と別れられず、朝鮮へ帰ることになる。澄子はおくにご「決して朝鮮のことを忘れてはみない」ことに「一種嫌悪に似た淋しさを感じ」る。だが澄子は留まるよ

う母に「要求をする権利はないのを知つてゐた」。父やお加代の支配下にあることや、「貧乏な女髪結の娘」になる決心がないからだ。そのうえ母は、明らかに経済的に困窮していると、澄子は気づいている。

このとき、澄子が目に浮かべるのは「単なる憐れみや同情の合鍵では決して開かない」「父の部屋の金庫」である。母の現実問題は朝鮮へ帰るための「お小遣」なのだ。「お母さんはお父様に貰つたお金で、平気で朝鮮へ帰れるのですか」という思いが澄子に去来する。母娘が隔たっていた時間は、この母娘の心の隔たりとなつてゐる。

一方、小兵衛はおくにの渡航費用を準造が出すべきだと考えて話をつけようとする。しかし準造は「不幸な母親が、十七年目に初めて生きてゐることを知つた娘に逢ひに来たのも、経済的約束を無視した以上」「単に無考へな愚な行爲としか」映らない。それゆえおくにの渡航費用に「判」をつかせようとする。おくにはむろん驚くが、小兵衛は弟準造の「高利貸」ぶりを確かめ、三十五円の現金と判を押しした五十円の約束手形と交換する。準造の非情さが際立つところである。だが澄子はここで、父親を「死ぬほど恥かし」と思うと同時に、「貰つた金ではなく、正當に借りた金なのだから」「大手をふつて朝鮮の待つてゐる人のところへ帰つて行ける」「母に取つては一つの救」だと考える。

「漸く物心がつきかけた時澄子が一番に意識したことは、自分の親は決して本統の父親でも母親でもないのだと云ふことであつた」と語られ始めた「澄子」の冒頭から、この少女がその内なる生命力で、こうした潔癖で論理的な考えをもつまでに成長したことを読者は思い知るのである。

反して、かつて「不具な醜い身体」ゆえに学問に邁進し、「精神的なもののみが持つ高貴な飛翔力に」頼ろうとしていた準造は遂には転落する。「その熱情は今度は一切の精神的なもの——学問と智慧と高貴と品性を振り捨てさせ、まつしぐらに逆な全く違つた谷の方へ彼を追い込」み、「徹底的な現実主義」へと彼を向かわせるのだ。金庫より背の低い準造ではあつたが、その影は後ろから照らされた照明で「まつ黒な異形な塊まり」となつて金庫にかぶさる。茶の間では狂つた時計が「十三時」を打つ。

〈準造もの〉はその体軀を「不具な醜い身体」と突き放し、「精神的なもの」を熱望した野心も急回転させる。準造を実娘澄子への情愛も、おくにへの同情もなく、お加代の美しさだけを所有しようとする男とし、金とひきかえに故郷との絆も断ち切る姿を描く。その内側まで「異形」の「狂った時計」だと他者化して表象しているのだ。しかしこの徹底して他者化された準造は、読む者からも隔てられるゆえに、その悲愴な孤独が際立ち、〈準造もの〉の主人公として確たる存在感を抱かせる。それは野上彌生子が写生文や〈育児もの〉から確実に脱皮して「一大作」を書き上げる小説家になったことを印象づける。だが彌生子自身は「狂った時計」を書き終えたあと、「完全ではないが書けるだけは書いたつもり。それ以上は仕方がない。あんまりうれしくもない」と「日記」(一九二四年十二月六日付)に記している。彌生子の言った「一大作」はより高次を目指していたのだろう。その目指すところへ、また彌生子がこののち歩み続けていくのを、後世のわたしたち読者は知っている。

## 七、『赤門前』…豊一郎の〈準造もの〉

先にふれたように、夫の野上豊一郎はすでに『赤門前』<sup>①</sup>で、〈準造もの〉でモデルになった豊次郎叔父とその内妻初を描いている。瀬沼茂樹が「半自伝的」と述べる通り、豊一郎自身を聞太<sup>もんだ</sup>として描いた私小説的キャンパス小説である。中心は「ロレンス事件」と言われる「明治四十年に、東京大学の英文科に起った小事件」<sup>②</sup>であるが、婚約中の彌生子をモデルにした「静子」を訪ねて、足撃く叔父宅へ出向く聞太の様子が描かれている。叔父は「静子の父の末の弟で、血から云ふと聞太には遠い旁系の縁続き」とされる。そして「準造とその兄弟」に描かれた選挙は次のように結果だけが語られている。

此の選挙の爲めに国元の兄は運動費として少からぬ財産を犠牲に供した。静子も聞太も其の頃は未だ故郷に居て、猛烈な競争に皆の熱して居る有様を見聞した。(中略)学問をさせるも考へ物だ。大学にも出せば洋行にも遣り、帰つて来ては、やれ就官だ選挙だと其度に莫大の金を注ぎ込んだ揚句が何一つ取柄もない此始末だ、と。斯んな愚痴を耳に挟む事も屢であつたが叔父は何も云はなかつた。敗軍の将は兵を諒らずさ、と苦笑した。

叔父は「半生の崎軀たる蹉跎に世の中を真正面に見る事が出来なくなつた。身体は不平の塊であつた」ともされるが、少なくともここでは、「準造とその兄弟」の準造に比べると、常軌を逸した行動もなく、温厚な性格にも読める。むしろ丸田という弁護士が悪態や、大学職員の俗物性のほうが目を惹く。そして留意したいのは、「静子」すなわち彌生子もこの選挙騒動を実際に「見聞」しているらしいことである。(準造もの)ではその「見聞」を澄子に託して、自身を登場させなかつた。いわば(去私)の方法を選択したのである。

また彌生子の描いたお加代は、非情で激しい気性であつた。だが『赤門前』では、台所で静子と御萩を作つたり、差押えのなかに静子の「仕立て下しのお召」があつたことを気の毒がつたり、柳橋時代に「妹の如く可愛がつた芸者」の「浜ちゃん」の不運に「シンミリ」と涙を浮かべる人情味のある叔母である。そして『赤門前』では、浜ちゃんの境遇を「此の如き場合に遭遇した時は、自分の美貌と芸を、若しくは其肉体を資本にして生活するより外に、何の方法が其処に残されてあるだらうか」と叔母が「語勢」として滲ませたとき、聞太は次のように感じている。

重大なる社会問題を提供された様な心持になつた。併し世間と云ふ者に経験の乏しい自分には、其に答へる丈の資格がないのは勿論、自分等の勢力範囲は未だ赤門の内側を出ないと云ふ事を感じた。

彌生子の〈準造もの〉は金で「買はれた妻」(澄子)となるしかなかったお加代への同情が希薄で、そこから逃れるはずの「駈落」(お加代)が突き放した筆致で語られた。しかし「赤門前」がそれを個人の問題として閉じ込めず、「社会問題」とする観点をもっていたのは留意すべきだろう。ただし「赤門の内側」から深入りすることなく対象との距離を保つところに、聞太の性格があるだけでなく、「赤門前」という小説の特徴がある。

加えて、彌生子が未来の夫によって小説中に描かれていたことは興味深い。卒業を前に学内の事件に巻き込まれ、学費の心配をしながら卒論を書き、卒業を前に父の看病に帰省するといった人生の岐路に立つ聞太が、メレデイスを読みながらこう考える。

自分を主人公ヒロインの地位に置いて見た。すると女主人公ヒロインの座に直る者は静子より外にない。(中略) 波瀾ハハも曲折キョクも無い。道行ミチユキも情死セイシも無い。長く続く春の汀。

『赤門前』では、豊次郎叔父たちが「波瀾も曲折も」少なく描かれている。「道行も情死」もなく、選挙違反も駈落も母娘の別れもない。まさに「長く続く春の汀」のように穏やかだ。それは「静子」すなわち彌生子が「女主人公」で、豊一郎が「主人公」だからだろうか。逆から言えば、「異形」の人として叔父の数奇な人生を描くには、「うんとく」勉強しようと成長し続けて、人生の大道をゆく彌生子自身は消去されなければならないのだ。

## 八、〈去私〉の方法へ

〈準造もの〉が発表された大正末期の文壇では、芥川龍之介がいわゆる〈保吉もの〉など自身をモデルにした私小説を書

き始めていた。たとえば、「少年」（一九二四・四）は「お加代」と同時に、「大導寺信輔の半生」（一九二五・一）は「狂った時計」と同時に『中央公論』に掲載されている。革命の文学を掲げるプロレタリア文学と、『文芸時代』を中心とするいわゆる〈新感覚派〉とが、文壇に地殻変動を起し始めていた。加えて〈心境小説〉という理念が浮上することと、芥川が自身の生活と小説とを近づけていったのは連動している。中条百合子も自身をモデルにした『伸子』『改造』一九二四・九（一九二六・九）を発表していた。

そのなかにあつて彌生子は、自身の「見聞」を表現するのも、彌生子自身だと想像されるような登場人物をあえて消去する。この時代に逆行する〈去私〉の方法で成功した。そこにはジェンダー的な問題も絡むだろう。彌生子は世代的にも育ちからも、女性として私生活を小説で赤裸々に表現することに強くなめらいを感じたのではないだろうか。元来、男性小説家の描くドラマチックな自己破滅は彌生子の生活からほど遠いともいえる上、身辺を描けば「お襦袢臭い作品」と揶揄されることもある。

あるいは、彌生子の小説作法の変化という観点では、日比嘉高論が参考になるだろう。身辺を描く〈写生文〉から出発し、その延長線上で〈育児もの〉という「自己表象テキスト」へ向かい、そこから新しい〈去私〉の小説方法へ向かっていったのだ。

しかし彌生子はもう一度自身を「加根」として登場させる。約六十年を経て、〈準造もの〉の主題を変奏させ、新たなヴァージョンとして『森』を描くことになるのである。

## 注

(1) 古庄ゆき子著、大分県立先哲史料館編『大分県先哲叢書 野上彌生子』（大分県教育委員会、二〇一一）、佐藤智美文、大分



- 県立先哲史料館編『大分県先哲叢書 野上弥生子〈普及版〉』（大分県教育委員会、二〇一三）参照。
- (2) 野上彌生子の作品は『野上彌生子全集』（岩波書店、第Ⅰ期 一九八〇～一九八二、第Ⅱ期 一九八六～一九九二）に拠る。ただし読み仮名は適宜省いた。また旧字体は改めた部分がある。他の引用も同様。
- (3) 「澄子」（『中央公論』一九二三・四）。傍点は引用者に拠る。以下も同様。
- (4) 四作発表の途中に「キリストと祖父と母」（『中央公論』一九二四・一）を挟んでいる。
- (5) 『野上彌生子選集 第四卷』（中央公論社、一九五二）。なお、瀬沼茂樹はその後も、『狂った時計』という総タイトルを採用。
- (6) 拙稿「野上彌生子の〈育児もの〉——〈新中間層〉と〈大正期教養主義〉のはざままで」（『愛知淑徳大学国語国文 第三十八号』二〇一五・三）を参照されたい。なお、〈新中間層〉とは、大正期の都市部に増加した「プチブル・インテリ階級」とも呼ばれた（小林嘉宏「大正期「新中間階級」の家庭生活における「子供の教育」」（『日本家族史論集十教育と扶養』吉川弘文館、二〇〇三）層である。教育レヴェルの高い夫婦とその子供で構成される核家族が多く、子供の教育に熱心であることが特徴としてみられる。
- (7) 注1に同じ。
- (8) 『東京朝日新聞』（一九二二・一・一）。引用は『漱石全集 第十六卷』（岩波書店、一九九五）。
- (9) 「新らしき命」（『青鞥』四一四、一九一四・四）。
- (10) 稲垣信子は『野上彌生子日記』を読む（上）（『明治書院、二〇〇三』）で、「豊一郎はこの駆落ちという題材が気に入らなかったのかもしれない」と指摘している。
- (11) 野上白川「赤門前」（『国民新聞』一九〇九年九月八日～十二月二十九日）。引用は『近代文学研究資料叢書（9）国民新聞 國民文學欄』（日本近代文学館、一九八三）に拠る。
- (12) 瀬沼茂樹「解説」（注11に同じ）。
- (13) 瀬沼茂樹『日本文壇史21 「新しき女」の群 回想の文学』（講談社文芸文庫、一九九八）に詳しい。
- (14) 森田草平「野上彌生子論 その印象二つ三つ」（『女性改造』一九二四・一〇）。
- (15) 日比嘉高「自己表象」の文学史——自分を書く小説の登場——（『翰林書房、二〇〇二）。

\*本論では取り上げた小説に倣い、「佝僂」などの用語をそのまま使用しているが、差別を温存、助長すべきではないという立場であることをご理解いただきたい。

(本学非常勤講師)